

教材編集の現場から見た日本語教育

スリーエーネットワーク

佐野智子

2018年9月21日

スリーエーネットワークの佐野智子と申します。本日はお招きいただきありがとうございます。本日は「教材編集の現場から見た日本語教育」というテーマでお話をさせていただきます。突然ですが、日本語教育の現場を演劇に例えてみますと、舞台上演じるのが日本語学習者と教師で、教材というのは小道具のようなものではないかと思っています。その小道具のような教材や教科書を制作している立場から、日々感じていることをお話しさせていただきます。

初めに、弊社スリーエーネットワークについて簡単にご紹介させていただきます。先ほど取っていただいた図書目録の最初に沿革が載っていますが、元々私どもは、1973年に海外技術者研修協会、通称で AOTS と呼ばれていますが、海外からの技術研修生に日本語教育を行っている団体の出版物を発行する会社として設立されました。今年で 45 周年になります。社名の「スリーエー」は、この AOTS が日本語教育を行っていた学習者の出身地域であるアジア、アフリカ、南アメリカの A の文字を取って、これらの地域の相互理解と友好を促進しようという思いでつけられた、ということです。初めは日本語教材を出すことから始まったのですが、現在では英語教材、そして各国語教材も発行しています。私は、ちょうど『みんなの日本語』が発行されました年、20 年前に入社しまして、以来ずっと編集を担当しております。では、まず、その『みんなの日本語』が出版されてから現在までの、弊社で出版した出版物を見ていただきながら、日本語教育の流れというものを振り返っていききたいと思います。

今申し上げましたように、『みんなの日本語』は 1998 年に発行されまして、その頃と言いますのは、中国、韓国、台湾といった漢字圏の学習者が中心でした。ほとんどの皆さんが日本語学校で進学を目的として勉強していらっしやって、日本語学校では日本語能力試験の 1 級合格を目指して指導が行われていたと思います。学習者も 1 級合格を目指して一生懸命勉強するという学生が多かった時代だったように思います。特に今と比べますと、先生方も文字指導とか漢字指導にあまり悩んでいらっしやなくて、生徒さんも 1 年から 1 年半くらいの留学期間を終えると大体 1 級に合格して、進学先も決まり、無事に日本語学校を卒業していったというような時代でした。教師の皆さんの関心も、文法について、特に 2 級以上の表現文型の使い分けをどのように教えていくか、ということに関心が高かったような記憶がありまして、教師向けの文法参考書というもののニーズが高まっていた頃だと思います。その頃筑波大学のグループジャマシイから『日本語文型辞典』が発行されたのですが、当時あれはかなり衝撃で、こういったものが今まで何でなかったのだろうと

いうくらい、皆さん手に取られて使われたと思います。その頃弊社では、文型一つ一つを教えるということとは別に、もっと文法というものを教師が包括的にとらえたうえで、一つ一つの文法とか文型を指導していくべきではないか、という考えの下に、2000年と2001年に『文法ハンドブック』を出版いたしました。この辺りから、日本語を教える上で文法を理解する参考書というのが、少しずつ出始めてきたかと思います。これ以前は、どちらかというと、専門書とか、日本語学の専門書を使って、先生方がご自分で調べになって、授業に活かすというようなことが中心だったと思うのですが、この辺りから、授業に使えるような文法を勉強するような書籍が増えてきたように思います。

2004年には、『中級へ行こう』というテキストを出しました。これ、もう第2版になっていますが、この少し前から、先生方の中で、初級終了後、中級に移行する時になかなかスムーズに移行できないということが問題になっていました。初級で皆さん体系的な文法を学習して、中級では読解中心の授業、というふうに急に変わってしまうこともあり、単文レベルの学習から読解中心の授業にスムーズに移行できないようなことが起こっていたようです。その間を繋ぐような、橋渡し、という言葉がこの辺りから出始めてきているのですが、橋渡しの教材が欲しいという声が非常に大きくなってきました。同じ2004年に『短期集中日本語文法総まとめ』を出しましたが、これもまた違った観点からの橋渡しの教材です。この頃海外で初級を勉強してから日本に来るといった人も増えていましたが、初級は終わったと言っている学習者が、中級に入ってみたら初級の文法項目等が定着していない、というような状況があったようです。それで、初級の学習内容を均すような教材が欲しいという声が出まして、そういったものが出始めてきた時期です。この頃、中級というものがどういうものなのかとか、初中級というものはどういうものなのか、かなり話題になった時期だったのではないかと思います。と同時に、留学生など、日本語学校にいる学習者だけではなく、少しずつ、多様化が見られるようになった時代だったかと思うのですが、年少者とか生活者に対する日本語教育というのも話題に上るようになりまして、そういった教材も出てきた時期です。

この辺りも順調に留学生も増えてきて、中国人の留学生を中心にきていたのですけれども、2011年に大震災が起こり、かなり状況が変わるきっかけになったのではないかと思います。2011年の震災の時に、韓国や台湾からの学習者がバツリ来なくなってしまいました。それを埋めるために、日本語学校がベトナムに目を向けたわけですね。で、ベトナムからかなり留学生が来るようになりました。それとネパールからの学習者が増えてきました。その頃は、増えてきたといっても、私たちの現場では、ベトナム語訳はまだいらないよね、と話していたような時代です。ベトナム語訳を本に入れてしまって、もしベトナム人が来なくなったら、必要なくなってしまうので、ベトナム語は別に訳だけで提供していいかというようなことを話していたのですけれども、そこからどんどんベトナムの留学生が増えて来まして、同時に日本語学校の先生からも、今までの漢字圏の学習者との指導方法が違うので、どういうふうにしたら良いか分からないという声を聞くようになりま

した。文字指導、漢字指導について、どうやって教えたら良いか分からないと。最近は大分それも落ち着いてきたかと思うのですけれども、ベトナムの方が増え始めたころには、ベトナム語が漢字と関係があるということをご存じの先生方はそんなに多くなかったと思います。また、読解の指導が、中国や韓国、台湾の学生が読んでいるような読み方ではなかなか読めないというような声も聞きまして、指導に戸惑われているのではないかなというようなことを感じました。学習進度が中国や韓国、台湾の学生のようにいかない、1年、1年半いてもなかなか N1、N2 に到達しないという声も聞くようになりました。今では N2 もしくは N3 を目指して日本語学校で学習するという方が増えてきました。私たちは『完全マスター』という能力試験対策のテキストを出しているのですけれども、当初 N1 と N2 しか出すつもりはなく、そもそも日本語学校にいる人たちが N3 を受けるとは全く考えていませんでした。それが今や、N1 と N3 の受験者と言いますか、教材の売れ行きで言いますと、大体同じくらいになってきていまして、日本語学校の中の教育内容というのかなり変わってきているのだなあ、というふうに思います。

そういったところで、次に実際の本の売れ行きからどんなことが見えてくるかということについてお話をさせていただきたいと思います。弊社で特に売れている書籍というものをピックアップさせていただいたのですが、まず『みんなの日本語』はもうご存じだと思いますが、これが売れている理由は、まずは翻訳が充実しているというのが非常に大きいと思います。これは今、翻訳文法解説で 12 か国語、語彙訳を 8 か国語提供しています。以前に比べて、教える先生方が翻訳に頼ってきている感じがいたします。何か教材を出しても、ベトナム語訳はないのか、ネパール語訳はないのか、というふうに、まず翻訳があるかないかというのを聞かれることが多くなりました。翻訳がなくても、そこは授業で先生方が工夫して教えて下さらないかな、と思うこともないのですけれども、やはり翻訳があった方が楽だ、というお声を非常に聞きます。

あとは、『みんなの日本語』は周辺教材が非常に充実しておりますので、ここも採用して下さる理由になっているのですが、これも以前だったら先生方がおそらくお作りになっていた教材というのを、市販教材に求められるということが非常に大きくなってきているように思います。もちろん、日本語学校の先生は非常にお忙しいので、授業準備が軽減されるものをなるべく使いたいという考えがあるのではないかと思います。

教科書の内容も、教える内容がハッキリしていて、練習が比較的多く載っていますので、教師にとって教えやすいという点が受け入れられているのだと思います。教えやすい反面、この教科書を使ってコミュニケーションをつけていくというのは、教師の方に非常に技量が必要だというふうに私共も感じています。学習者にも、かなりトレーニングと言いますか、練習というのを強いる教科書です。これが出版された頃は、それについてあまり練習が機械的でつまらないとか、そんな話はあまり実は聞かなかったのですね。で、それによって話せないという話も、実はそれほど聞かなかったのですが、最近では、そういった声が上がってくるようになりまして、『みんなの日本語』で初級をやっても話せるようになら

ない、とか、『みんなの日本語』で教えてもコミュニケーションが付かないという声をちょっと聞くようになりました。教科書にも色々と問題があるのかもしれませんが、昔と、やはり学生さんの学習目的とか、教え方というのも少しずつ変わってきているのかな、というふうにちょっと感じます。

次に挙げさせていただいたのが『中級へ行こう』という本です。これは元々橋渡し教材として出版されたのですが、従来の中級教材からこの教材に採用を変更するところが多くなりました。震災前の漢字圏がやっていた中級に比べると、かなり易しめになっています。学習者層も変わってきていますが、今、中級と呼ばれている学習内容がかなり易しめになってきているのかな、というふうに感じます。ですから、うちで従来出していた『J301』という教科書があるのですが、もうそれだと難しくて使えないということで、そういう教材から易しめの教材に変わっていった、というところがあります。

『新完全マスターシリーズ』ですが、先ほどリーフレットをお配りしたのですが、能力試験対策というのは、やはり日本語教育の中心なんだな、と日頃から感じています。皆さんお話しされる時に、「それはN3ですか」、とか、うちの教材についての問い合わせも、「N5なんですか」、というふうに、能力試験の級を基準になさいますし、先生方が教材をお作りになる時も、N3以上はルビを振るとか、N2以上の漢字を使うとか使わないとか、そういうふうに基準にされるのは、やはりこの能力試験になっているな、というふうに思います。

それが今、技能実習生等を受け入れる団体も、これを基準にし始めてきています。こういった技能実習生を受け入れる団体の中に、おそらく日本語の専門家というのはほとんどいらっしやらないように思うのですが、国が例えばN5以上とかN4以上というふうに言ってきていることもあって、うちのこの『完全マスター』を「これで技能実習生を教育したいから許可をくれ」というような言い方をされるときがあります。そういった方たちに、「いや、これではちょっと日本語のコミュニケーションとか話す力はつきませんよ」と言っても、「いや、日本語能力試験のN3を皆取りたがっているから、この本が良い」というような感じで、これを教育に使いたいとおっしゃったりします。それは『みんなの日本語』についても同じです。今『みんなの日本語』というのが、知名度があるものですから、『みんなの日本語』を使って教えるビデオとかeラーニング等を作って、海外に配信し、教育した人を日本に連れてきたいという声もよく聞きます。そういった人たちから弊社にお問い合わせが来るのですが、こういうお問い合わせを聞いていると、日本語教育に、日本語教育の知識や専門性がない方たちが、すごい勢いで入ってきているように感じます。このような方たちは、日本語学校とか大学に相談したくても、どこに相談したら良いか分からない。その時に『みんなの日本語』の後ろの方を見ると、うちの電話番号が書いてあって、ここだったら聞いても良いかな、と多分思うのでしょうね。それで相談したいというようなお話を受けるのですけれども、専門家の方がいらっしやらないところで、映像を作って、海外に配信して、教育されてしまう外国人の学習者って……、と、少し心配です。

話がちょっとそれてしまったのですが、あと売れているのが、『日本語文法ハンドブ

ック』です。これが実は、最初、先ほども言いましたように、教師の方が教える上で、今までの専門書等よりもアクセスしやすい本として作ったつもりだったのですが、これも難しいとおっしゃる先生方が増えてきていまして、今、こちら（『考えて、解いて、学ぶ 日本語教育の文法』）が大変好評です。これが先ほど小林先生の方でお話にあった、日本語の知識等を勉強されるのと大体同じような内容で、日本語の助詞、自動詞、他動詞、ボイスとか、そういったものを勉強していくのですが、一つ一つ演習形式になって解いていくような形になっています。これがここ2、3年、急に始まりました、勉強する人たちが増えているのだろうな、と思うのですが、求められる教材というものが易しめになってきている、という傾向があると思います。

ちなみにどんなものが売れてないかと言いますと、ここには書かなかったのですが、専門書は非常に厳しくなっています。それが、一つは、やはり皆さん買って下さらないということが一番の問題です。大学などで先生が課題図書などに指定されたときに、学生さんがそれを買ってくださっているのか。この間も他の書店の方とお話ししていた時に、専門書が売れなくなると、専門書を置く書店がなくなるので、専門書の流通が難しくなってきたり、やはり、良い専門書を出して行って、それが売れていかないとね、というふうに言われたのですけれど、難しい本ほど、売れにくくなってきています。読書自体がかなり減っているうえ、昔に比べて、読書にかかる時間を、皆さん今スマホの時間に替えてしまっているのじゃないかな。本を読むという習慣自体が、若い人たちになくなってきていますし、たとえ本を読む時間があっても、その時に専門書を読むのだろうか、というように思います。

そういった意味でこれに関連して、教材等でも最近難しいなあと思うのは、具体的な内容ではなくて、方法論のみが書かれているものというのなかなか手に取っていただけなくなっていました。例えば、クラスでこういった活動をした方が良いということで、そういった活動の理論とか、例を載せた本というのがいくつかあるのですけれども、そこまでだと大体先生方はお求めにならなくて、全部書いてある、例えば授業やるのなら、その授業の流れ全部書いてあるものが欲しい。例だけだと、なかなか売れていかないですね。時々『みんなの日本語』の教案が欲しいと言われて、それは先生方がおやりになることであって、目の前にいる学習者を見ながら、『みんなの日本語』なんかを道具として使っただいて、ご自分で考えていただきたいのですけれど、まあ、教案が欲しいというニーズは非常に聞きます。ただお書きになる先生も嫌だろうなというふうに思います。誰を想定して教案なんて書けば良いの、と多分おっしゃると思うので、多分実現はしないと思うのですけれど、この先ちょっと分からないな、という気もいたします。

あと売れないものとして聴解教材。これは、昔からなのなのですが、やはり音声指導というのは軽視されているのかな、というふうに思います。やはり音声の時間、それだけの時間を取るという学校も少ないですし、それよりはやはり文法とか読解を中心、ということになっているのだと思います。あとはコピーですね。聴解教材が一番コピーされやす

い教材として、それは優先順位が低いから買わないでコピーされるのだろうな、と思います。でもコピーをしてしまうと、結局出版社は売れないから作らなくなっていくのですね。今、他の出版社を見てみても、聴解教材ってあまり出ていないのですけれど、理由はそれだと思います。作るのものすごくお金がかかるのですが、売れない、と。日本語関係の出版社というのは皆規模が小さいものですから、大変なのだと思います。

以上のことから、傾向として、教材は易しめに分かりやすく、すぐ使えるものというのが求められているように思います。私が言うのは偉そうなのですが、先生方が考えて工夫する余地が残っている教材というのが、先生たちを成長させて、日本語教育のレベルを上げていくのではないかな、と思います。昔、ハンドブックとかがなかった時代は、先生方が専門書とか色々な文法書に当たられて、この表現とこの表現ってどう違うのだろうとか、これを教える時にどういうふうに注意したら良いのだろう、ということを皆さん調べられて、それで授業を組み立てられて、というのがあったと思います。しかし、そういったことを出版社に聞いてくる人がいる、というのが、次の話です。私たちの基本的な業務は教材の編集、制作なのですけれど、外部からの問い合わせ、教科書についての問い合わせというものが多くあります。その時に文法についても聞かれることがあります。一つには裾野が広がってきている、色々な方が日本語を教えることになってきていることが原因だと思います。もちろん、ちゃんと教えていらっしゃる方もいらっしゃるのですけれど、やはり色々な方がいらっしやって、また、相談する方もいらっしやらないのかなというふうにも思います。例えば日本語学校や大学だったら、同僚の先生にどういうふうに教えたら良いのか、とか相談したり、皆さんで研究会のようなものを開かれて、どう教えれば良いのかというようなことを相談する機会もあるかと思います。日本語学校について言えば、そういったことをきちっとやっぴらっしやる学校さんもたくさんあるのですけれど、今、急に日本語学校が増えてきていまして、4、5年前に400校だったのが、今700校を超えています。急に増えて日本語の先生たちも多くなっているところで、おそらく先生方の繋がりというのも変わってきているのかと思います。例えば、授業をやってもそのまま帰ってしまって、先生方との交流がないとか。そうすると、ちょっと分からないという時に、うちのホームページに問い合わせ、というメールフォームの所があるのですが、そこに質問を送っぴらっしやるのでしょね。今のネットの時代というのを反映しているのかなと思うのですが、分からないことがあつたらそこに質問を送る。やはり商品のことなのだから答えなければならぬのかもしれないのですけれど、でもどうなのだろう、と思うものもございます。

また、『みんなの日本語』の初版を出したときは、練習Bというドリルレッスンの変換練習の結果どのような文になるか、という答えを載せていなかったのですが、載せて欲しい、という問い合わせが増えてきて、第2版の時に載せてしまいました。練習Bの答えが分からない、正確な答えを知りたいから答えを書いて欲しいということです。『新基礎』はそういう意味では実は少し不親切な教材で、そういったものは一切載せていないのですが、時々

まだ『新基礎』を使っている方からお電話があって、何で答えがないんだ、って聞かれることがあります。先生が考えてお答えになるんじゃないでしょうか、というふうにしかならないのですけれども、その辺の常識も変わってきています。

『みんなの日本語』の初級には、「助詞」というパートがありまして、学習者向けなので、助詞の用法は書かないで、A、B、C というふうにカテゴライズしています。で、『新基礎』の時は、A、B、C がどのような用法かといった問い合わせはほとんどなかったのですが、『みんなの日本語』になってから、用法を教えてくださいという要望が多く来たので、第2版の時、それを全部書いたものを、『教え方の手引き』に付けました。このような傾向は、裾野が広がってきたのでそういう先生が増えたのだらうということが一つと、インターネットの普及などにより、聞けるものは人に聞いた方が早いということになってきているのかな、というふうに思います。

あとは、先ほどちょっと申し上げました『みんなの日本語』の二次使用申請の増加ですね。これが最近増えて来ていて、時々日本語学校や大学の方からも、『みんなの日本語』の本を、例えば映像にして、eラーニングなどにちょっと使いたいというお問い合わせを受けます。最近増えてきているのは技能実習生受け入れ団体ですね。その時に、『みんなの日本語』で良いのか、と思う時があるのです。「いや、『みんなの日本語』が良いんです」とおっしゃって、使いたいとおっしゃっているのだったら、使っていただいても良いかと思うのですけれど、それがふさわしいのかどうか、一応お話しするようにしています。

このような状況を見ると、日本語教育について明るくない人たちが、もしかすると、今後日本語教育の大きな部分に関わってきて、担っていく可能性が出てきてしまうのではないかなと思います。例えば、そういった団体の方が大学とか日本語学校に相談をして、授業を委託するなどしてくれたら良いのですけれども、大体話を聞いていますと予算が限られているようで、録画して大勢のところで配信、というような発想になるのだと思います。そうすると、今色々な、例えば学会とかで新しい教え方とか、先生方が色々なアイデアを出されて、日々授業の効果的な方法を模索しているのに、一方では、それとは全く別世界で、日本語教育のようなものをしようとしている人たちが大勢いる。その人たちと話していると、もしかすると言語教育をそんなに重要に捉えていないのではないかな、と思う時もあります。私たち日本人が、英語は別ですけど、他の語学を勉強する時に、それほど新しい教授法に出会うということはあまりないかもしれません。例えば私がベトナム語を勉強しようと思って、ベトナム語を教えてくれる教室というのに通いましたけれども、昔ながらの、読んで下さい、日本語に訳して下さい、といった授業で、単語の暗記が宿題に出てというような、そういうやり方ですね。もしかしたら、まだ言語教育をこのようにとらえていて、そういった人たちが、技能実習生のところで日本語を教えているとすると、一方で非常に研究が進んでいるところと、そういったところというのはどうやったら結びつくのだろうかと思います。この間文化庁の教師研修という話もありましたが、あれも日本語学校等で教えている先生方が対象になっています。日本語学校の教育の質を

上げるというのももちろん重要なのですが、来年の4月から労働者がかなり入ってきますね。その要件として日本語教育の質の向上、とさらっと書いてあります。それ誰がやるのだろうというのが、非常に不安でして、私たちも微力ながら、例えばそういったところで、使っていただけそうな教材を開発して、少しでも、学習者が困らないような日本語教育が提供できないかなというふうに考えています。ですが、なかなかそういった技術研修生とかその辺の日本語教育を専門にやっという先生方がいらっしやる先生方がいらっしやるなくて、JITCOとか昔のAOTSで教えていらしたような先生方にご相談して、そういったことを考えていかなければいけないのかな、と思うのですが、非常にこの辺は、私たちも危機感があります。それでこんなところで、また『みんなの日本語』を使われて、「いや、『みんなの日本語』で話せるようにならないね」と言われたら……。その辺はどうにかしていきたいな、と思います。

最後に、教材企画について少しお話をさせていただければと思います。弊社では、会社で企画して執筆者の先生を探して書いていただくものと、先生方から企画のお話をいただく場合とございます。どちらにしろ、弊社から出させていただく以上は、できるだけ多くのユーザーの方に使っていただきたいと思って、日々仕事をしております。執筆者の先生方もかなり苦勞をされて、時間も労力もかけて教材をお作りになるわけですし、弊社もそれにお応えできるように、編集にはかなり力を入れているつもりです。その後の営業活動にも、うちは力をいれていまして、日本語学校等の機関さん向けと書店さん向けと海外、というふうに部署を分けて、きめ細かくやっております。これだけ著者も、編集も、営業もみんな頑張っていて、そこで買って下さる方もいらっしやる中で、あまり良くない教材を出してしまうと、みんなが不幸になってしまうな、というふうに思います。買った人が「この教材は全然使えない」と思うものを作ってしまったら、その方たちにも失礼ですし、色々な人たちが一生懸命頑張ってきたのに、努力が報われないということになってしまうので、出すからには売りたいという気持ちを強く持っております。売れるということは、多くのユーザーに受け入れてもらえているということです。多くのユーザーの方に受け入れられて理解されている教材というのは良い教材といえるのではないかというふうに思っています。ですから、ちょっと安直に聞こえてしまうかもしれませんが、売れる教材というのを目指して制作していきたいなと思っています。

今まで弊社から出させていただいて売れるな、と思った教材というのは、まずは理念のあるもので、先生方がこういった教育をしたい、という熱い思いが感じられる教材です。一般書に比べて、何万部も売れるわけではないですけど、日本語のこの業界の中で考えた時に、着実に毎年、少しずつでも売れていきます。あとは、現場の必要性から生まれたものとか、最近ちょっと減ってきてしまっているのですけれども、現場で使われてから企画として出されたものですね。それがその現場だけではなくて他の現場でも使えるなもの、というのは、やはり売れていきます。あと、ターゲットがはっきりしているということが大事だと思います。よく、教材には汎用性が必要だから色々な人に読んでほしい、と

おっしゃる先生がいらっしゃるのですけれども、色々な人に読んでもらえるものというのは、誰も読まない可能性もあるのです。この人たちに読んでほしいというのがはっきりしている方が、その人たちに確実に届くように思います。あとは使いやすさなのですが、よく教材に何でも盛り込みたい、というお声を聞くのですが、何でも盛り込みすぎると、使いにくさに繋がります。『みんなの日本語』の話なのですが、皆さんご存知だと思いますけれども、『新基礎』のシラバスを使って作っているわけなのですが、初版を出した時に、『新基礎』に足りないと思ったコミュニケーションに関わるもの、というのをかなり入れたのです。そうしたら、ユーザーから使いにくいという声を聞きまして、第2版ではほとんど戻しました。そういったこともありまして、盛り込みすぎというのは、確かにコミュニケーションに必要なのだけど、教材に入れてしまって良いのか、というところは慎重にならなくてはいけないと思います。例えば、それは別の教材で補って教えていくということも考えられるのではないかと思います。あと、著者の方が書きたいこととか、発表したいことと、ユーザーの読みたいものというのがずれるという場合があります。新しい考え方を発表するという出版の意義はあると思うのですけれども、そこにユーザーの関心が全く向いていないと、やはり、本としてなかなか動いて行かない、ということがありますので、この辺が一致していると良いな、というふうに思っています。

ちょっと話が変わるのですが、先生方が色々な本をお書きになったりする時に、他の人の著作物を使う時の著作権というのには、非常に私共も気を遣っています。20年位前は、厳しく言う人もあまり多くなかったのですが、ここ10年くらい、かなり厳しくなっていて、他の人の著作物を使おうと思うと、許可を取るのには当たり前で、多くの場合、使用料を払うことになっているのです。そのうえ、使用方法や内容によっては、使用の許可を出したくない、というような著作権者の意識というのが非常に高まっています。この間ちょっと残念なことがあったのですが、非常に良い企画のお話があったのに、それが新聞記事の投書欄を使ったものだったのですね。新聞記事の投書欄というのは、許可が出にくいです。言葉のレベルとかトピックも、その時の状況を捉えていて非常に使いやすいのですが、個人の方が、特に匿名で出されている場合は、ほぼ許可が取れないですね。連絡を取らせてもらえない、ということです。個人情報観点から連絡はできません、というふうに言われてしまって、取れない。その一方で、日本文藝家協会という、作家さんたちが登録していらっしゃる著作権に関する協会がありまして、ここは、逆に非常に許可が取りやすいので、こういったところの著作物を使っていただくと、作りやすいのかな、とも思います。

私共が出しているものは、日本語教育という限られた分野の書籍なのですが、この出版とか流通というのは、年々厳しくなっているなあ、というふうに感じます。ちょっと流通の仕組みについてご説明をしようかと思うのですけれども、教材はやはり本ですので、基本、販売ルートというのは、日本では書店の間にいる取次という問屋さんみたいなものがあるのですが、取次を通して書店に行く、というのが原則で、大学の生協さんに納

めさせていただくものも、基本的には取次を通す。直接やっている出版社もあるのですが、うちはその取次というところと関係を良くして、販売をしていこうという方針です。その取次というのが何をするのかというと、私たちが刷った本を、トラックで全国の書店に運んでくれます。ただ、その取次もあまり売れない出版社のものは力を入れたがらないという問題もあります。書店さんの所に本が段ボール箱で届くのですけれど、書店がいないと判断した本は、うちの倉庫に返されてしまいます。一度倉庫に返されると、それはもう古い本扱いなのですね。本が返ってきたときに、ここが汚れていると、ここを薄く切るのですね。だから、本屋さんに行くと、ちょっとこの高さが違う本が並んでいる時があるのですけれど、それはここ、擦っちゃったからなんですね。削っちゃったからなんです。そういうふうに関わって、またそこで綺麗に、改装というのですが、改装したものがまた書店に並ぶのですが、またそこでちょっと売れなかつたりすると、戻ってきちゃうんです。このように何回も倉庫と書店を行ったり来たりしてしまう本もあるのですが、うちとしては、なるべく置いてもらえるように、書店に直接営業に行きまして、書店にある棚、本棚のこのスペースにうちの本を置かせてくださいという営業をしつつ、あと、新刊が出たらこの本はこういう本なので、ということを書店さんに説明をして、是非注文して下さい、というふうをお願いするわけなのです。書店から注文が入ると、その注文数が多いものを、その取次がやはりチェックをしていて、これ売れそうだ、と思うと、扱いが良くなる、ということで、非常に地道な努力が必要で、例えば文庫を出している大手出版社なんかも、文庫の棚というのはどこの書店にもありますから、そういうところは新刊を出したらそこに並ぶのですけれど、うちみたいなところは、本当に、書店の棚に本を置いてもらう、というのが非常に大変です。一つ得をしているのは、やはり『みんなの日本語』が売れているおかげで、『みんなの日本語』を出している出版社ですよ、という、ああ、じゃあ置きましょうか、というふうに言って置いてもらえる、ということで、そういった意味でも『みんなの日本語』は役に立っていると思います。

あとは、買って下さる方の多くが日本語の先生なので、日本語の先生方に対して、こういう本が出たということセミナーを開いたりして告知をして、先生方に教材に対する理解を深めていただいて、それで教材を使っていただくという努力もしています。

電子書籍やアプリというのも、出てきてはいるのですが、これも非常に広報が難しいな、というふうに感じています。電子書籍は海外でも日本でも買えますし、いつでも買えるということで、一見便利そうなのですが、その電子書籍がある、ということを広報する方法が意外と限られています。そういった意味で、今、出版とか書店というのが、実は全体的に見ると非常に悪いので、どうやって流通させていくのかということも考えながら仕事をしております。

最後になりますが、学習者が急増し、日本語学校がかなり増えてきてまして、教師の数というのも急に増えてきています。今、養成講座出たらすぐ就職できると言われているくらい、就職も良くなってきているのですけれども、数が増えているのに比して、じゃあ、先

生方の教える力とか、あと、学習者の日本語力ですね、それが向上しているかという点、不安に感じることもあります。先ほども言いましたように、日本語教育の知識がない方たちが、その団体や個人の方たちがこの業界に入ってくることに對して、私たちはどういふサポートができるのか、という点も、考えていかなければいけないかな、と思っています。そういった意味で、皆様のお力を借りながら、先生方の教える力とか、学習効果のある教材の出版というものをこれからも目指して、良い道具を作っていければいいな、と思っています。以上です。

—質疑応答—

○紙で出している教科書を e ブック化すると、両方販売はできるのですか。e ブックだとちょっと値段も変わるかもしれないのですが。さっき広報が難しいとおっしゃいましたが、紙で出ているのが e ブックにもあるよ、というような広報の仕方というのはどうなのですか。海外で購入される方は e ブックがあった方が良く思うのですが。

◎両方出すかどうかというのは、出版社の事情によると思うのですが、電子書籍だけ、というよりは紙の本も一緒に出した方が良く思います。(日本語の教材のように部数が少ないものは)、紙の方が出しにくくなっていると思います。いわゆる電子書籍だと、簡単に作られて出せますので、紙の本があつて、電子書籍があるというものに関しては、先生のおっしゃったような広報の仕方が良いのではないかなと思います。

○実際に日本語教育の教材にそういうのはあるのですか。

◎あると思います。うちでも『小説ミラーさん』という本を電子ブックと紙の本で出しています。多分他社さんでは、専門書を中心に電子書籍で出しているんじゃないかと思っています。

○売れる方向性というのは、紙と e ブックとは。

◎電子書籍で全体的に売れているのはマンガと雑誌と言われています。ただ、(それ以外の)普通の本は、どちらのほう売れているかは分からないのですが、やはりまだ紙だと思います。ただ、マンガや雑誌などは e ブックの方が主流になってきているかもしれないですね。

○日本語教材はまだまだ?

◎日本語教材はまだだと思います。一方で『みんなの日本語』の e ブックが欲しいという声も聞きます。実は弊社でも、必要があれば e ブックにしてお出しします、というサービスを(他社と協力して)やっているのですが、まだあまり需要はないです。やはり皆さん紙の方が良いのでしょうか。多分タブレットといいますか、端末が備えられないという事情があるのかもしれないですね。